

世界遺産『紀伊山地の霊場と参詣道』に ふさわしいみちのありかた

シーニック・バイウェイに関するシンポジウム

「紀伊山地の霊場と参詣道」の世界遺産登録を機に、紀伊半島への関心が高まっている。美しい景観のみならず、歴史・自然・文化など、紀伊半島が育んできた個性や魅力をどのように活用し、この土地を訪れる人々に伝えていくか——今後、地域と行政が一体となって取り組まなければならない大きな課題である。

2005年6月18日、熊野本宮大社が位置する和歌山県田辺市にて「世界遺産『紀伊山地の霊場と参詣道』にふさわしいみちのありかた ～シーニック・バイウェイに関するシンポジウム～」が開催された。「シーニック・バイウェイ」とは、「景観」を意味するシーン（Scene）の形容詞・シーニック（Scenic）と、「わき道」を意味するバイウェイ（Byway）を組み合わせた言葉で、景観・歴史・文化・自然・建築など、地域の魅力を「道」でつなぎながら、地域と行政が連携して、美しい景観づくり、魅力ある地域づくりを目指す制度である。「シーニック・バイウェイ」の研究に関する第一人者、石田東生先生らをゲストに迎え、アメリカや北海道での先進事例を参考にしながら、地域住民・NPO関係者・行政関係者等とともに紀伊半島におけるシーニック・バイウェイ制度導入の可能性を考えた。

<開催概要>

- 開催日 平成17年6月18日（土）
時： [開演] 13:30 / [終演] 16:00
- 開催場所： 田辺市山村開発センター「大ホール」
- 主催： シーニック・バイウェイに関するシンポジウム
実行委員会
（国土交通省近畿地方整備局紀南河川国道事務所・
和歌山河川国道事務所・和歌山県）
- 後援： 奈良県
三重県
- 協賛： 社団法人近畿建設協会
和歌山県道路協会

<プログラム>

- 13:30 [開演]
| 開会挨拶
- 13:40
| 基調講演
| 「みんなでつくる美しいみちとまち
| ～シーニックバイウェイ制度の導入～」
- 14:40
| 休憩
- 14:50
| パネルディスカッション
| 「紀伊半島における
| シーニック・バイウェイの可能性」
- 16:10 [終演]





世界遺産『紀伊山地の霊場と参詣道』に ふさわしいみちのありかた

～シーニック・バイウェイに関するシンポジウム～

HOME

開会挨拶

基調講演

パネルディスカッション

アンケート

<開会挨拶>

酒井利夫（和歌山県 県土整備部長）

和歌山県は、沿岸部が非常に起伏のある海岸線で、内陸部は深い山々が重なり、その地理的な制約から道路整備なども大変遅れている。例えば、道路整備の改良率はやっと50%超。各都道府県と比較しても下から2番目であり、全国平均から見てもやっと25年前の全国平均に達したという現状である。こうした理由から、この地域を訪れる観光客が不便を感じたことがあると思う。しかし、逆に言えば、自然や歴史などの文化的な名所は俗化することなく残され、貴重な観光資源になっているということも言えないだろうか。実際、2004年7月に「紀伊山地の霊場と参詣道」が世界遺産登録されたことを機に、観光客数は3,000万人を超えて過去最高となり、この地域においては「観光」という言葉が地域振興にとって、非常に大きなキーワードになっている。



和歌山県のみならず、「紀伊山地の霊場と参詣道」を中心とした紀伊半島全体の魅力を更に磨き上げ、より多くの方々にこの地域を訪れていただくためには、あるいはこの地域をもっと元気にするためにはどうしたらよいか。これは行政だけではなく、地域住民にとっても大きな課題であり、この課題を解くキーワードこそが、本日のテーマ「シーニック・バイウェイ」ではないかと期待している。単に目的地に行くというだけではなく、寄り道をしながら、また自分だけの新しい発見を楽しみながら通行できる道づくり、それはハードの整備だけではなく、地域住民と様々な連携をし、共に活動していく、そういう総合的なシステムが必要だと思う。

約10～15年前、日本では「道の駅」という制度が始まり、当初日本全国で108ヶ所ほど作られたが、現在は700ヶ所以上に増加した。この「道の駅」が、“点”として、地域の魅力を発信する制度であるとするれば、「シーニック・バイウェイ」は、地域の魅力を“線”で繋ぎ、さらには“面”的な広がりを持つ制度とも言えると思う。本日のシンポジウムを契機に、地域住民と一体となって、地域の魅力づくりや活性化・地域振興を考えていきたい。

世界遺産『紀伊山地の霊場と参詣道』に ふさわしいみちのありかた

～シーニック・バイウェイに関するシンポジウム～

HOME

開会挨拶

基調講演

パネルディスカッション

アンケート

■ 講師プロフィール



石田東生氏
(筑波大学社会工学系教授)

1951年大阪生まれ。東京大学大学院工学系研究科修士課程修了。筑波大学社会工学系助教授、教授を経て、現在、筑波大学大学院システム情報工学研究科教授。専門分野は、都市計画・交通計画。著書に「環境を考えたクルマ社会」（共著）など。

<基調講演>

「みんなでつくる美しいみちとまち」

石田東生氏

(筑波大学社会工学系教授)

「みち」の持つ本来の力を活かし、
「まち」を作り上げていく

「シーニック・バイウェイ」とは何か？一言で言えば、「みんなでつくる美しいみちとまち」ということだと考えている。「道路」と言う物理的な存在としての意味だけであるが、「みち」という「人と人が付き合うこと」「一緒に協働すること」などの意味合いも含む。「みち」が「まち」を形成する骨格となっていることを考えると、「みち」と「まち」を同時に考える、つまり「みち」の持っている本来の力を活かしながら、地域住民と一体となって「まち」を作り上げていくことが重要である。



「シーニック・バイウェイ」の主役は地域住民

観光でその土地を訪れる人は、ポイントポイントの素晴らしい景色だけではなく、移動する際に目にする景色も含め、全体のイメージや思い出を大切にもの。「国土の印象は、交通路線で移動しながら見る景色でおおよそ決まってしまう」

12年前に「シーニック・バイウェイ」を開始したアメリカと比較して、日本の景色はポイントポイントでは勝っていると思うが、連続性という意味ではまだまだ負けている。

さらには、「親切な人がいた」「美味しいものを食べた」などの体験がその地域全体のイメージ、旅行の印象として心に残るものである。その地域の雰囲気をつくり、景色をつくっているのは、何よりその地域に住み、その地域を愛している人々である。これらの人々の存在が「シーニック・バイウェイ」のポイントである。



行政は黒子として補助や支援を

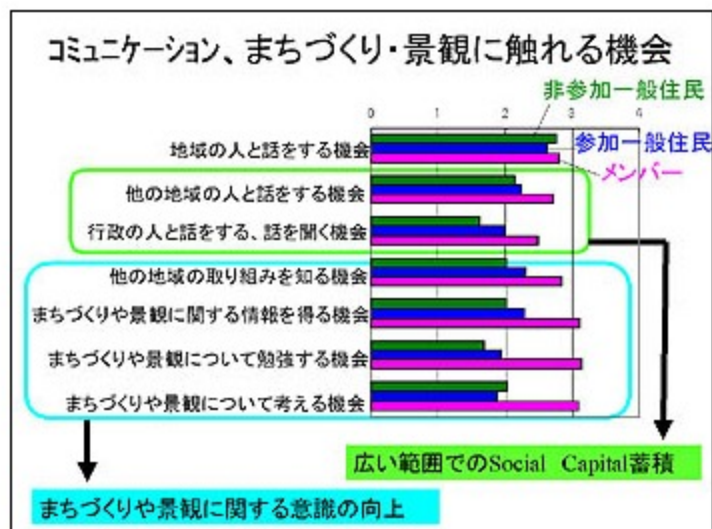
アメリカの活動体制は、国が一律に行うのではなく、その地域に詳しい人が様々な価値を発見し、お互いに連携しながら活動するというもので、主役は地域・コミュニティであり、政府・行政は補助や支援を行うというもの。具体には、地域の創意工夫で自由に使える補助金や、観光客を呼び込むための広報活動、品質管理を維持させるための審査などを行う。活動のための資金やノウハウはきちんと準備をする。あるいはブランドを維持するために厳しいことも時には言う。行政は黒子であるが、こういう支援は行う。このことは私たちがアメリカから学ぶべきことである。

には言う。行政は黒子であるが、こういう支援は行う。このことは私たちがアメリカから学ぶべきことである。

北海道における効果 ～ソーシャルキャピタルの充実～

日本では北海道において、地域が持つ独自性を活かした北海道版「シーニック・バイウェイ」への取り組みが行われている。約2年が経過した現在の評価として、体制づくりと地域住民の参加意欲の向上はおおむね達成できたが、その中身はまだまだこれからと考える。効果としては、「ソーシャルキャピタル(*)」の重要性が強く認識されたことがある。旭川のある地区の調査では「他の地域の取り組みを知る機会」や「街づくりや景観に関する情報を得る機会」「勉強をする機会」「考える機会」が増加するという結果が得られた。また、道路の一定の区間を地域の方に管理を委任する「ボランティアサポートプログラム」の実施団体も、「シーニック・バイウェイ」の導入を契機に約5倍に増え、効果の一端ではないかと考えられる。

※信頼関係・規範・相互扶助・人的ネットワークなど、人と人や組織などとの繋がりや資本・資源としてとらえたもの。地域づくりにおいて最も重要と考えられる。



楽しみながら、地域一体となって、快適な地域づくりを目指す

北海道では「シーニック・バイウェイ」導入により、「やる気が出てきた」あるいは「難しくなくてよく分からなかったが、やればできるという気が出てきた」と人の気持ちが変わりつつある。このような成果があるからこそ、「シーニック・バイウェイ」への期待が高まり、全国的な広がりを見せているのだと感じる。

これから皆さんには主体的に「何をしたいのか」ということを明確にしていだきたい。さまざまな想いがあると思うが、さらに具体的に「何をしたいのか」ということを、地域住民、産業関係者、行政関係者が考える。そして、お互いに対話しながら、実現できることの拡大をさらに考えて進める。そのようなコミュニケーションの場を持つことが「シーニック・バイウェイ」の本質なのだと考える。

抽象的な話に聞こえるが、実際に「シーニック・バイウェイ」の活動が始まると、実践につながる。議論は具体的になり、焦点がぼけない。その中で、意見の衝突などもあると思うが、何よりも楽しみながら、地域が一体となって、より快適な地域づくりを目指すことが大切ではなかろうか。



世界遺産『紀伊山地の霊場と参詣道』に ふさわしいみちのありかた

～シーニック・バイウェイに関するシンポジウム～

HOME

開会挨拶

基調講演

パネルディスカッション

アンケート

■パネリスト・プロフィール



石田東生氏
(筑波大学社会工学系教授)

1951年大阪生まれ。東京大学大学院工学系研究科修士課程修了。筑波大学社会工学系助教授、教授を経て、現在、筑波大学大学院システム情報工学研究科教授。専門分野は、都市計画・交通計画。著書に「環境を考えたクルマ社会」(共著)など。



小野田真弓氏
(熊野古道を世界遺産に登録するプロジェクト準備会 運営委員代表)

1965年和歌山生まれ。国士舘短期大学国文学部卒業。97年、熊野古道を世界遺産に登録するプロジェクト準備会を発足。和歌山県ベンチマーク審議委員、和歌山県河川審議委員などを務める。



泉正徳氏
(和歌山県本宮町 前町長)

1951年和歌山県本宮町生まれ。74年近畿大学理工学部卒。会社役員を経て97年町議会議員当選。1期目の途中、99年町長に就任。和歌山県道路協会副会長、スロータウン連盟副会長、東牟婁町村会会長を歴任し、2期目の2005年4月市町村合併により退職。



和泉晶裕氏
(国土交通省北海道開発局 道路調査官)

1961年北海道生まれ。86年北海道開発庁(現国土交通省)入庁。国土庁大都市圏整備局、国土庁防災局阪神淡路大震災対策担当大臣特命室、国土交通省北海道局開発専門官を経て現職。

<パネルディスカッション>

「紀伊半島におけるシーニック・バイウェイの可能性」

【パネリスト】

石田東生氏

(筑波大学社会工学系教授)

小野田真弓氏

(熊野古道を世界遺産に登録するプロジェクト準備会 運営委員代表)

泉正徳氏

(和歌山県本宮町 前町長)

和泉晶裕氏

(国土交通省北海道開発局 道路調査官)

黒谷努氏

(国土交通省近畿地方整備局 紀南河川国道事務所長)

【コーディネーター】

古田晴氏

(テレビ和歌山 報道局長)

「紀伊山地の霊場と参詣道」の魅力と、それを取り巻く環境

【古田氏】

世界遺産に登録された「紀伊山地の霊場と参詣道」は、紀伊半島全体にとって非常に重要な資産であり、こうした地域における「シーニック・バイウェイ」導入の可能性について探っていききたい。まず「紀伊山地の霊場と参詣道」の魅力とそれを取り巻く現状についてお話しただきたい。



【小野田氏】

紀伊半島には、広範囲に渡って山・川・海といろいろな自然要素が詰まっている地理的魅力と、文化の奥深さという歴史的的魅力がある。熊野古道を世界遺産に登録する活動では、高野山とか那智の滝を単体で世界遺産に登録したいという意見も多くあったが、地理的、歴史的、両方の魅力を活かすために、各地をつなぐ道も含めた地域全体を世界遺産に登録することに意味があると考えた。

【泉氏】

世界遺産登録を受けて、この土地を訪れる人が増加したが、まだまだ情報発信については十分でなく、文化や歴史、さらには移動の手段まで、正しい情報を発信する必要がある。同時に、今まで培ってきた文化的景観とそこの人々の暮らしを守っていくことも重要である。「熊野古道」は、文化や経済、人々の暮らしをつなぐ道というものの意味を考え直す、良いきっかけになっていると思う。

【黒谷氏】



現在、高速道路はみなべまで供用しているが、大阪から白浜や新宮まではまだまだ時間がかかるのが現状である。整備状況としては、白浜～すさみ間が新直轄で整備することが決まり、新宮方面からは那智勝浦道路が工事中というように、紀勢線がようやく紀伊半島を一周するということがなんとなく現実味を帯びてきたような状況である。その中で、高速道路が完成することによって、海岸線を走る42号線もシーニック・バイウェイという概念を意識した使い方など、今までと違う使い方の可能性を考えていく必要がある。

アメリカや北海道の「シーニック・バイウェイ」の導入の背景や 現状と紀伊半島で活かすべき要素

【古田氏】

今お話しいただいた、熊野古道の地域的魅力や、観光と地域住民の生活の両立、さらには高速道路などのインフラの整備などを考えると、紀伊半島におけるシーニック・バイウェイ導入のための土台はあるのではないかと。次に、アメリカや北海道の「シーニック・バイウェイ」の導入の背景や現状をふまえて、紀伊半島で活かすべき要素についてお聞きしたい。

【和泉氏】

北海道では、ドライブ観光が「団体型」から「個人型」にシフトしており、少しでも長い間、北海道に滞在してもらおう環境を整えようと考えた。観光客は北海道の景観に魅力を感じている人が多いため、「沿道景観」を改善しなければならない。道路の周りだけでなく、その横の家や農村風景、森林風景すべてが「沿道景観」を構成するものであるため、地域の農家の方、森林を維持している方と一緒に取り組みをしていかなければならない。その取り組みこそが「シーニック・バイウェイ」を始めるきっかけであった。

紀伊半島は、北海道にはない重厚な歴史を持っている。北海道で今苦労しているのは、地域の方が自分の地域に愛着と誇りを持つためのストーリーづくりである。ここは歴史や文化という点で羨ましいほどの素材がいっぱいある。





黒谷努氏
(国土交通省近畿地方整備局 紀南河川国道事務所長)

1957年大阪生まれ。80年、建設省(現・国土交通省)四国地方建設局(現・四国地方整備局)入省。その後、国土庁、近畿地方建設局(現・近畿地方整備局)企画部、道路部、兵庫、大阪、豊岡の事務所で、地域整備や道路整備を手掛ける。2004年4月から現職。

■コーディネーター・プロフィール



古田 皓氏
(テレビ和歌山 報道局長)

1946年北海道生まれ。関西大学文学部新聞学科卒業。73年にテレビ和歌山入社後、営業課長、報道部長、報道局長を経て、現在、取締役報道局長。

[石田氏]

アメリカや北海道がその土地それぞれの魅力を活かして「シーニック・バイウェイ」を導入してきたように、紀伊半島もこの土地の魅力を活かすような形を採っていくのが良いのではないかと。世界遺産に登録する際に熊野古道という「道」を一つのテーマにした「アイデア力」、多くの人が共に協力して世界遺産登録を成し得た「結束力」などの「人の力」も感じる。そうした要素をどう紡いで、どういう形でアピールしていくかが、最重要課題ではないか。

「シーニック・バイウェイ」導入の具体的方向性

[古田氏]

「シーニック・バイウェイ」の先進事例を経験されたお二方の意見を聞いても、紀伊山地の霊場と参詣道における「シーニック・バイウェイ」導入の可能性は非常に高いものがあると感じられる。次のステップとして、NPOや民間ボランティアなど地域住民も含めて、地域全体がどのように取り組んでいくべきか、具体的な方向性について伺いたい。

[小野田氏]

北海道における民間団体の活動は、世界遺産登録前後の紀伊半島の民間団体の活動と似ており、NPOや地域住民の方は登録運動で学んだことを応用していけば良いのではないかと。ただし、アメリカや北海道での事例を模倣するだけではなく、和歌山独自の「シーニック・バイウェイ」を考えていくべきである。私たちは以前から体の五感全体を使って熊野を感じて欲しいと考えており、例えば、車で熊野に来て五感を感じられる、窓を開けて走っても排気ガスの臭いが無く、音の静かな環境に優しい車社会の実現を目指す、ハイブリッドカー等のレンタカーをこの一帯で導入するなど、他にはないテーマが必要。



[泉氏]



「シーニック・バイウェイ」とは、道路などの言葉にとらわれずに、みんなを連携する、繋ぐための手段であると考えた方がわかりやすい。行政やごく一部の人だけが関わることを改め、NPOや民間ボランティアなどもっと多くの人たちで情報交換をし、人と人が繋がっていくということが有効ではないか。もう一つ「シーニック・バイウェイ」を通じてできることは、文化的景観の保全だと思う。景観も、そこに人が住んでいるからこそ保たれるのであり、地域住民が土地や田畑をどのように守っていくか、子孫にどのような景観を残すかという問題を解決することも可能ではないか。すでに本宮のある地域では「わがらのいそしいじげづくり」(私たちの元気な

地域づくり)という標語のもとに、2年前から自分たちの地域を自分たちで考え、様々な活動を行っている。

[黒谷氏]

私たち行政としても、景観に配慮した社会資本整備を進めていく必要はあると考えている。紀南地域ではボランティアサポート、街づくり、村おこしグループなど、いろいろな団体の方にご活躍いただき、美化清掃や花壇の整備などを進めている。今年4月に行った「未知普請」近畿大会によって、横のつながりや年齢的な縦のつながりもできつつあるように思う。

[和泉氏]

北海道では、「場作り」ということを強く意識した。まず、民間の活動団体、地域住民、行政の人間が集まって共に話し合うワークショップを開催した。ワークショップでは、「行政が何をしてくれるのか」という質問が毎回出たが、その都度、「あなた方が何をしたいのかわからなかったら、行政も何をしたいのかわからない」と地域の人に自分たち自身で考えることを促してきた。もう少しわかりやすく言うと、「自宅にお客さんを招く時に、家の中を掃除して、花を飾り、自分の得意料理を振る舞い、自分の家の歴史や地域のことについて話をする。それがいわば『シーニック・バイウェイ』だと。そして、それを皆さんでやりませんか」と投げ掛けてきた。

ワークショップ参加者も徐々に理解し始めてきたが、中々うまくいかなかったのはやはり行政の方である。組織の垣根や担当者の温度差があった。しかし、徐々に参加意識の高い行政の担当者が始めたのも確かで、今後が楽しみである。

[古田氏]

北海道での話を聞いていると、和歌山県での南紀熊野体験博において行政と住民が一体になって活動し、成功したことを思い起こす。

[石田氏]

様々な立場からの話を聞くと、紀伊半島における「シーニック・バイウェイ」の可能性は非常に高いと思う。小野田さんが言ったとおり、自分たち独自のやり方を考えていくことはとても大切なこと。「何がしたいのか?」を自分たちの言葉で考えるべきではないだろうか。

「シーニック・バイウェイ」導入の具体的方向性

[古田氏]

最後に一言ずつまとめを。

[石田氏]

現在、日本にはアメリカのように「シーニック・バイウェイ」に関する法律があるわけでもなく、制度として体をなしているわけでもない。これからの活動が制度に反映されていくものだから、自分たち自身のことを、自分たちの言葉でよく考えて、遠慮なく活動して欲しい。



[小野田氏]

私たちNPOや民間団体が行動を起こすべきことも大切であるが、行政も含め、頑張ろうとしている人たちと一緒に集まって、早い段階から何をしていくかを考えていくことが重要。

[泉氏]

日本には「借景」という言葉があるが、私たちも世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」という景色を借りて、議論を進めていく場をつくっていききたい。公衆浴場で富士山の絵の景色のもと、皆で語り合うように、世界遺産という景色のもと、気楽に皆さんと一緒に話を進めていきたいと思う。

[和泉氏]

肝心なのは、「シーニック・バイウェイ」に対して、持続的に取り組んでいける人たちがどれだけ集まって来るかということ。また、「場作り」の次に課題となるのが資金面。地域一体となって継続的な取り組みや資金づくりのアイデアを出し、行政はPRという側面からお手伝いをする。そうしたシステムが効率的なサイクルとしてまわっていけばいいと思う。

[黒谷氏]

田辺市で行った「未知普請」近畿大会では、夜間や土日に、行政の担当者が地域の方々と一緒に活動し、手づくりのいいイベントができあがった。地域と一体になって活動することは手間暇が掛かるが、行政だけの都合で考えてつくったものよりも出来たものに魂が入る。行政としても労力を惜しまずに、地域の方々と一体になって取り組みたい。



世界遺産『紀伊山地の霊場と参詣道』にふさわしいみちのありかた

～シーニック・バイウェイに関するシンポジウム～

HOME

開会挨拶

基調講演

パネルディスカッション

アンケート

<アンケート> (回答総数: 131)

「シーニック・バイウェイに関するシンポジウム」アンケート

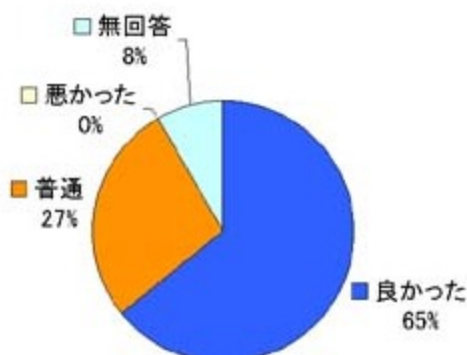


■アンケート項目

- Q 1. シンポジウムに参加してどうでしたか？
- Q 2. シンポジウムを聴講して、ご自分の仕事・活動の参考になりましたか？
- Q 3. 紀伊半島での「シーニック・バイウェイ」は実現可能だと思いますか？
- Q 4. 紀伊半島で「シーニック・バイウェイ」を実現するには、どのような施策が有効であると考えられますか？（複数回答可）
- Q 5. 紀伊半島で「シーニック・バイウェイ」にふさわしいと考える場所・路線名等をお聞かせください。
- Q 6. シンポジウム全体を通して、ご意見・ご感想をお聞かせください。

Q1 シンポジウムに参加してどうでしたか？

良かった	84
普通	36
悪かった	0
無回答	11



[▲ページトップへ](#)

Q2 シンポジウムを聴講して、ご自分の仕事・活動の参考になりましたか？

はい	104
いいえ	16
無回答	11



【具体的に】（一部抜粋）

●仕事・活動の視点が、点から面にと言うように、紀伊半島全体で考えようという意識になりました。

●自分達がやりたいと思ったら具体的に動く事。動き出さなければ何も起らないという事を再認識

●地域活性化の為には、世界遺産登録のみのインパクトだけではなく、継続して広く他の地域のアピールが必要である。そのためには「シーニックバイウェイ」を使った地域活性化が必要と感じ 官民一体となる沿道整備が必要と思った。

●シーニック・バイウェイの言葉は知っていたが、具体的なイメージは理解できない状況でシンポジウムに参加した。「みんなで作るみちとまち」「未知普請」「参加と協働」「ボランティアサポート」等具体的な説明があり自分なりにイメージがわいてきた。

[基本事項]
(回答総数: 131)

■性別

男性	111
女性	19
無回答	1

■年齢

10代	1
20代	12
30代	24
40代	29
50代	47
60代	15
無回答	3

■居住地

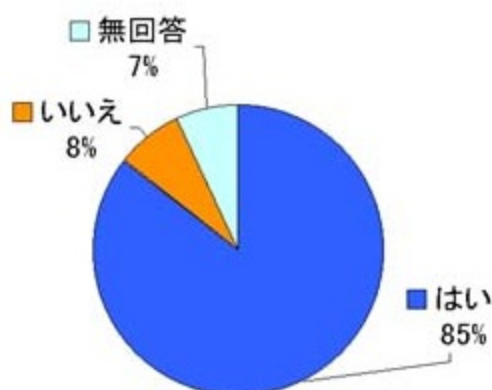
和歌山県	85
三重県	13
奈良県	11
その他	12
無回答	10

■属性

公務員	71
会社員	27
自営業	8
主婦	6
その他	17
無回答	2

Q3 紀伊半島での「シーニック・バイウェイ」は実現可能だと思いますか？

はい	112
いいえ	10
無回答	9



[▲ページトップへ](#)

Q4 紀伊半島で「シーニック・バイウェイ」を実現するには、どのような施策が有効であると考えられますか？（複数回答可）

地域住民・NPOと行政との連携	90
沿道景観の保全・創出	69
観光資源・ビューポイントなどの発掘・整備	65
道路網の早期整備	48
県内外への積極的な広報	32
行政内部の連携	29
その他	9
無回答	4



[▲ページトップへ](#)

Q5 紀伊半島で「シーニック・バイウェイ」にふさわしいと考える場所・路線名等をお聞かせください。

（一部抜粋）

- 国道311号線
- 国道168号線
- 国道42号線
- 田辺～竜神便、とくに奇絶峡より虎ヶ峰まで
- 枯木灘海岸をゆっくりみながらのドライブ。熊野川の川くだり
- 那智勝浦古座川線（古座川滝の拝～那智山）
- シーニック・バイウェイは車が通る道だけではなく、フットパスもS Bの大切な一部。古道はすばらしいシーニックルートになると思う。
- 紀南全域

[▲ページトップへ](#)

Q6 シンポジウム全体を通して、ご意見・ご感想をお聞かせください。

（一部抜粋）

- 単なる道路の改良だけということではなく、景観、歴史、文化を大事にした トータルでの道路整備を考えることが重要。元々熊野は国立公園であり 国道168号線の白いガードレールを景観に合うように考えて欲しい。単に目的地まで早く着くということだけではなく、走って楽しい道づくりをいっしょに考えたい。
- シーニックバイウェイが持つ、広い意味が伝わったのだと思います。各地でがんばっている方がいることがわかり、力をもらった気がします。
- とても興味深い内容でした。和歌山にもシーニックバイウェイの可能性は 十分あると思うが、もっと今後このような取り組みがあることを知らせていく 必要があると思います。そういった意味でも今回のシンポジウムは重要な 足がかりになると思いました。
- 楽しく、健康的に生きていけるアイデアを、多くの団体・行政・年れい層幅 ひろく住民と関わって意見を聞いたり、このような会も多く必要と感じました。北海道のシーニックバイウェイの話はとても興味深かったです。
- 熊野地域の更なる可能性を感じた。もっと熊野に誇りを持ち、外部に発信しなければと思った。

[▲ページトップへ](#)